

# キリスト教「前夜式」に関する一考察

中 野 敬 一

A study of the Christian “Zeny-Shiki”

NAKANO Keiichi

## 要 旨

日本のほとんどのキリスト教会では、葬式の前夜に特別な儀式が行われる。これらの儀式は「前夜式」や「通夜」、「通夜の祈り」などと呼ばれている。最近の傾向として、前夜式のような儀式の参列者が葬式よりも多くなっているという。このような状況が起こっているのは多くの参列者が前夜式しか来ることができないからである。葬式が行われる日中の時間は彼らにとっては不都合である。そこで教職者は前夜式だけに来る参列者に考慮する必要に迫られた。その結果として、葬式が二度繰り返されているように見えるのである。

このような状況をみて、ある一人の牧師が「前夜式は不要である」と提唱している。しかし、前夜式や葬式は遺族や近親者を慰める重要な機会であり、それぞれが独自の役割をもっているのである。われわれは特に前夜式の重要性を明らかにしなければならない。本稿では前夜式の必要性について検討し、キリスト教前夜式を積極的に行うための神学的動機を考察する。

キリスト教の各教派は個々の礼拝式文を使っており、日本基督教団、カトリック教会、日本聖公会、日本福音ルーテル教会、カンバーランド長老教会では異なった式文が使われている。それらを通じて前夜式と葬式の違いを確認し、特に前夜式の特徴を明らかにしたい。

式文に従うことは重要である。われわれは式文が示す前夜式の目的と指示を知る必要がある。前夜式の中心は祈りであり、前夜式の目的の一つは遺族や近親者のために集まり祈ることである。前夜式は葬式とは異なる特別な祈りの礼拝である。キリスト教会がこの目的を見失わなければ、誰も前夜式が不要であるとは言えないであろう。

**キーワード：**前夜式、通夜、葬式、礼拝式文、日本基督教団

## Abstract

Most Christian churches in Japan have a special ritual that is held on the night before a funeral. Such a ritual is called a “Zenya-shiki” (night before service), “Tsuya” (wake, vigil), or “Tsuya no inori” (wake’s prayer) among other names.

As a recent tendency of these Christian churches, the attendance of rituals like Zenya-shiki is more than a funeral. The reason why this situation has happened is that many mourners can come for only Zenya-shiki. When the funeral is held in the daytime, it is inconvenient for them. The clergy need to consider mourners who can come for only Zenya-shiki. As a result, the funeral seems to be repeated twice.

Because of this situation, a certain clergy has suggested that a Zenya-shiki is unnecessary. However both the Zenya-shiki and the funeral are significant opportunities to console the bereaved, and each has an original role. We must clarify the importance of Zenya-shiki in particular. In this paper the need for a Zenya-shiki is discussed and the theological motives needed to conduct Christian Zenya-shiki proactively are considered.

Each Christian religious sect uses their own individual book for services. The difference between Zenya-shiki and the funeral is confirmed through them and can be clarified by the characteristics of the Zenya-shiki in particular. Different books of service are utilized by the following five sects: the Nihon Kirisuto Kyodan (The United Church of Christ in Japan), the Catholic Church in Japan, the Nippon Sei Ko Kai, the Japan Evangelical Lutheran Church, and the Cumberland Presbyterian Church (Japan Presbytery).

For all Christians in Japan it is important to obey the book of service. We need to know the purpose and intention of Zenya-shiki that these books show us. The center of the Zenya-shiki is prayer. One purpose of Zenya-shiki is to gather and pray for the bereaved. Zenya-shiki is a special prayer service that is different from the funeral. If the Christian church does not lose sight of this purpose, no one can say that Zenya-shiki is unnecessary.

**Key words:** zenya-shiki, wake (vigil), funeral, book of service, The United Church of Christ in Japan

## はじめに

日本基督教団に所属する多くの教会・伝道所では、葬式前夜に「前夜式」という儀式を行っている。前夜式は一般的には仏教の「通夜」に相当するものと紹介されており、葬儀関連のウェブサイトなどにもそのような解説が見られる。前夜式という名称は、キリスト教の各教派によって異なり、「通夜」あるいは「通夜の祈り」など別の名称も使用されている。いずれの場合でも一般的に知られる通夜とは内容や形式が異なっている。前夜式は徹夜で遺族・近親者が遺体を守ることや酒食を供する機会ではなく、キリスト教信仰に基づく礼拝形式で行われるのが通常である。教会礼拝堂で行われることが多く、開始の刻限が定められている。

さて昨今、一部のキリスト者から前夜式は不要ではないかという意見が聞かれるようになった。一例を挙げよう。キリスト教の一般向け月刊誌として広く知られている『信徒の友』（2013年度2月号）に日本基督教団に所属する牧師から投稿があった。「葬儀は一回だけで十分、前夜式を見直そう」という題でキリスト教葬儀、特に前夜式についての問題提起がなされている。

前夜式を「棺前祈祷会」としている教会もあります。どんな理由をつけようが、仏式の「通夜」が変化したのです。しかも、葬儀と前夜式では形式も内容もまったく同じです…第二葬儀となっているのが現状です。前夜式と葬儀と何が違うのでしょうか。葬儀一本で行ったらよい、と考えていますが、もしどちらも行うのなら、もっと前夜式と葬儀の違いを明白にすべきです…繰り返しますが、葬儀は一回だけでよいのではないのでしょうか<sup>1)</sup>。

葬式と前夜式が同一化してきているので葬式一本にするか、両者の違いを明確にすべきだというものである<sup>2)</sup>。「形式も内容もまったく同じ」というのはいささか極端な表現であるが、ここで指摘されていることは特殊なことではない。しかも後述するがこの種類の発言は日本基督教団の教会で聞かれるだけでなく、他の教派においてもしばしば議論されているのである。前夜式（名称は教派により様々）と葬式が似てきていて、まるで葬式が二回行われているように見えるという。なぜこのような現象が起こっているのだろうか。

そもそも両者は別の目的をもつ式であり、その形式や内容は異なっているはずである。しかも前夜式は葬儀諸式において非常に重要な位置を占めており、割愛して葬式と一本化するという案には容易に賛成できるものではない。本論では前夜式の現状を把握した上で前夜式の意義を確認することを目的としたい。そして複数の教派の式文（礼拝式）を参考にしながら、キリスト教会の前夜式を行う時に重要な視点を検討する。この作業により前夜式と葬式が似てきているという状況を打開できると思われる。

## 1. 前夜式の現状

『礼拝と音楽』137号（2008年）で「夜の静けさの中で一通夜の祈り・各教派の葬儀式文より」

という特集が組まれた<sup>3)</sup>。五つの教派（カトリック教会、日本聖公会、ルーテル教会、日本基督教団、カンバーランド長老教会）の教職者がそれぞれの教派における通夜、前夜式などの現状を紹介している。ここでは顕著な共通点として（１）前夜式の参列者増加（２）前夜式と葬儀の類似について取り上げる。

### （１）前夜式参列者の増加について

今日キリスト教会では前夜式の参列者が増えており、しかも葬儀の主たる儀式である葬式への参列者よりも多い場合があるという。先に挙げた『礼拝と音楽』の各教派からの報告によると、「現在は様々な事情から通夜への参加をもって社会的責務を果たす人が増え…」（カトリック教会）、「最近では、葬送式よりも通夜の祈りの参列者の人数が多いということがよく話題になる」（日本聖公会）、「最近ではこの『夜の礼拝』への参加者数が、葬儀・葬送・告別礼拝のものに優る現象も見られるようになり…」（日本基督教団）、「前夜式だけ出席する人が増えているので…」（カンバーランド長老教会）と、5人の内4人が異口同音にそのことを述べている。後で紹介するルーテル教会も同じ状況となっているようである。いずれもが教派を代表した発言ではないが日本におけるキリスト教会全体の傾向になっていると見て良いだろう。

この現象の解説は難しいものではない。今日の社会情勢をみると葬式参列者の減少は当然のこととも思われる。葬式は主に午前中か日中に行われるが、これは後に続く火葬の都合による。火葬場の利用可能時間（多くは夕方まで）から逆算して葬式・出棺の時間が決まるのである。つまり葬式は午前中や日中にならざるを得ない。しかし仕事や育児等を行う人々がこの時間帯に出席することは困難であり夜に行われる集会のほうが好都合ということになるのである。これらの事情は近年に始まったことではないが、今日では以前より顕著になってきたという。

### （２）前夜式と葬式の類似について

最初に挙げたように両者が似てきていることは問題となっている。『礼拝と音楽』には「前夜式と告別式で二度同じ葬儀が繰り返されるように感じる人もあるかもしれない」（ルーテル教会）、「時には葬儀が二回行われているような様相を呈している」（日本基督教団）、「前夜式も葬礼拝に類似したものとなっていて、同じ事を二回繰り返しているような現実がある」（カンバーランド長老教会）といった意見も見られる。

これらの現象の理由は何であろうか。詳しい考察を必要とするが「葬式が二回繰り返されるよう」になったのは、上の（１）前夜式参列者の増加が大きく関係しているのではないかと推測する。前夜式の参列者が増えることで配慮が必要になってくるのである。例えばカンバーランド長老教会牧師の荒瀬牧彦氏は「前夜の時間は、もともとそうであったように、親しい者たちが集って故人を偲ぶ語らいをする性格の、インフォーマルな祈りの時にしたほうがよい」という同教団内の意見を紹介しつつも、「多くの人が前夜式を葬式に替わる別れの時と期待してくるという現実も無視できません」と述べている<sup>4)</sup>。具体的な配慮としては、公的な形式による礼拝を行うことや説教で語る内容を吟味することである。しかしこの配慮が行き過ぎると前

夜式と葬式が似たものとなる結果を導き、葬式が二回繰り返されているようになってしまうことになる。さらにこのような情報が共有されるといずれか一方に参列すれば良いという認識も生じる。そうなるとますます前夜式と葬式が類似してくるという悪循環となるのである。

### (3) 葬式との一本化について

以上のような前夜式の状況は社会情勢が大きく変化しない限り今後も続くと思われる。そうになると効率的な方法として近い将来に前夜式と葬式の本化が図られる可能性がある。その場合削除されるのは前夜式になるだろう。名称からわかるように葬式前夜に行われるのが前夜式である。しかも出棺と結びついた葬式は残さなければならない。しかし葬式の前夜に何も行わないことが悲しむ遺族を前にした教会の態度として相応しいのであろうか。死という痛切の極みである出来事に人々が寄り添う営みが欠如しているのは非常に大きな問題ではなかろうか。

仮に葬式に一本化された場合を想定してみよう。葬式への出席努力をする人もいるだろうが、参列を断念する人は確実に増える。これを解消するには様々な工夫が要求される。例えば人の集まりやすい夜の時間帯に葬式を行うという発想はどうであろうか。夜に葬式を行い、翌日に出棺式を行うというものである。実際アメリカでは葬式が夜に行われてその日のうちに棺葬されるというケースもある<sup>5)</sup>。しかし日本人の感覚からすると葬式を夜に行うことが受容されるのかはわからない。それ以前に疑問も残る。そもそも参列者の都合を優先させて葬式を夜に行うという発想は本末転倒ではないだろうか。しかも夜には出棺できないので遺族は遺体と共に翌日の出棺式まで過ごすことになる。そうなると結局は「通夜」等が必要になるだろう。夜の葬式という案は安易に採用できるものではないのである。

ところで、葬式一本化という着想はキリスト教会内だけのものではない。今日の日本では「一日葬」と呼ばれるものが普及してきている。通夜を行わず葬式だけを行うというものである。この背景には日本人の超高齢化という現実がある。男女の死亡年齢が年々上がっていることによって通夜や葬式への参列者が少なくなっている。退職後から長期間が経過することで仕事上の関係者の参列はほとんどない。子の世代までもが既に定年を迎えている場合には遺族の職場関係者も減る。さらに地域社会や近隣との人間関係も希薄になり隣近所からの参列者がいない場合もある。高齢化による単身世帯の増加という問題もある。孤独死の場合は遺体が自治体で処理されて通夜や葬儀は行われない。また高齢者の貧困世帯も増えており葬儀費用が捻出できない人々も少なくない。このような状況の行き着いた先が、通夜どころか葬式すらも不要であるという考えであり、そこに「直葬」と呼ばれる新しい方法が登場し、それを望む人が年々増加しているのである。「一日葬」や「直葬」などの世間における容認はキリスト教の葬儀の在り方にも大きく影響を及ぼすことになるだろう。今後の対応を早急に検討しなければならない時期にわれわれはいるのである。

## 2. 日本基督教団の葬儀式文

前夜式と葬式が同じようになっているという問題提起に対して、われわれはそれぞれの式で何が行われるかを改めて確認する必要がある。日本のキリスト教会で行われる葬儀の多くは

「葬儀諸式」と呼ばれ、臨終から埋葬に至るまでの諸式が含まれている。その際には「葬儀式文」（以下、式文）が用いられる。式文を検討することで、前夜式と葬式で行う内容や指示が確認できる。まず日本基督教団の式文を検討する。

### （１）『日本基督教団文語式文』『日本基督教団口語式文』『新しい式文 試案と解説』

日本基督教団で最初に用いられた礼拝式文は『日本基督教団文語式文』（以下『文語式文』）第一版（1949年）であり、葬儀諸式として6種の式文（納棺式、前夜式、出棺式、葬式、火葬前式、埋葬式）が収められている。『文語式文』の後継として使用されるようになった『日本基督教団口語式文』（以下『口語式文』）には新たに「記念式」が加えられて7種となった。それぞれの式次第はこの通りである。

#### 〔前夜式〕

讃美歌、聖書、主の祈、聖書、祈祷、讃美歌、説教または感話（随意）、讃美歌、祝祷（あるいは終祷）

#### 〔葬式〕

前奏、聖書、讃美歌、聖書、祈祷、讃美歌、故人略歴（省略するも可）、説教または式辞、祈祷、讃美歌、弔辞、頌栄、祝祷（あるいは終祷）、後奏

両者を照合すると数多くの一致があり、前夜式は葬式が簡略化されたもののようにも見える。式文にある前夜式についての指示には「これは葬式の前の夜に行う式であるが、場合によっては永眠の夜または火葬の前夜に行ってもよく、あるいは納棺式を兼ねて行ってもよい」とある。最低限の指示内容であり、その目的や意義について記されていない。また葬式にはその最低限の指示すら記されていない。旧教派の影響が強力な時代に作成された式文であるがゆえに、各教会の伝統に委ねることにしたと想像するが、いずれも改善が求められる点である。

前夜式と葬式の相違点は、前者の「説教または感話」が後者では「説教または式辞」となっていることと、弔辞があることである。しかし葬儀の実態においては両者の違いは明確ではない。説教と式辞については、参列者への配慮で両者の内容が同一化してきたと先述したが、そもそも両者の違いを明確に説明することは難しい。ただし牧師の裁量により両者に差異をつける工夫はされている。例えば前夜式では故人略歴と共に故人の人生が具体的なエピソードを交えて紹介され、葬式ではキリスト教の教義や聖書解釈を中心としたメッセージが語られることもある。しかし多くの場合、それぞれが混在した内容で語られている。弔辞に関しても葬式だけで行われているとは限らない。時間的余裕のある前夜式で弔辞が披露されることも少なくないのである。

ちなみにこれまでに式文改訂の議論が無かったわけではない。『口語式文』は現在も日本基督教団の諸教会で使用されているが、1970年代には改訂を求める声が挙がり、日本基督教団信仰職制委員会（以下、信仰職制委員会）において様々な検討が重ねられてきた。その成果とし

て1990年には『新しい式文 試案と解説』（以下「『試案』」）が出版されたのである。ただし信仰職制委員会は直ちにこの使用を各個教会に求めたわけではなかった。『文語式文』の「序」には「これらの式文は、プロテスタント教会の立場からいえば、絶対普遍の規範ではなく、大体の基準を示す参考であるから、これを採用すると否とは各教会及び各教職に自由であり、また或箇所を省略するか否かも使用者の裁量に任せられている」<sup>6)</sup>と示されている。同委員会は『文語式文』を作成した日本基督教団教学部の方針を受け継ぐ姿勢をとったのである。

『試案』は正式な式文としての採用は見送られたが、様々な考慮がなされており評価できる。葬儀諸式として八種の式文が用意されている。

- 1 枕頭の祈り、2 納棺の祈り、3 前夜の祈り（通夜の祈り、棺前祈禱会）、4 出棺の祈り、5 葬送式（故 記念礼拝）、6 火葬前の祈り、7 埋葬の祈り（墓所の前で）、8 記念会（記念礼拝）

『口語式文』と比較すると二点の違いがある。まず七から八種へと式文の数が一つ増えている。新たに「枕頭の祈り」も加えられた。「まえがき」には、臨終やそうでない場合も「早い機会を得て、遺族、関係者とともに、遺体のかたわらで、まず、祈りの時をもつことが望ましい」とある。また、「主のたすけと導きのうちに葬儀のいとなみに当ることができるよう」に祈り、葬儀のいとなみに入るに際して、「死の厳粛さを確認すること」を勧めている<sup>7)</sup>。いずれも重要な指示であり式文に加えた意図も理解できる。しかしここで挙げられているような祈りは式文に採用される以前から葬儀を行う時に際して当然のものとして実践されてきたものである。既に現場で行われてきたものを念のために加えておいたという理解でよいだろう。

もう一つの違いは、葬送式以外が「祈り」という名称に変更された点である。前夜式は「前夜の祈り」（通夜の祈り、棺前祈禱会）に変更された。信仰職制委員会によると「教会の公同礼拝を基調に構成される『葬式』のみを（〇〇式）と呼び、そのほかの信仰の交わりと牧会的配慮に基づいて行われる諸式を（〇〇の祈り）と呼ぶこととした」とある<sup>8)</sup>。葬式と他の式の性格を分けたいという意図が見える。さらに、葬式以外の諸式は「教会の公同礼拝を基調」とすることに制限されていない。葬儀という性格を踏まえながら、より自由な発想により諸式を行うことが許されているのである。

では本論で扱う「前夜式」に関連するものとして、「前夜の祈り」（通夜の祈り、棺前祈禱会）という名称に変更されたものについて検討しよう。

#### 〔前夜の祈り〕

聖書、祈り、主の祈り、奨励、感話、思い出など、讃美歌

現行の前夜式の式文は葬式の式文が簡略化されたものと先に述べたが、前夜の祈りは、それ以上に簡略化されている。ただし新たに「祈り」が加えられているのが特徴である。前夜の祈りの「まえがき」には祈りについての指示が詳細になされている。

逝去から葬送のいとなみの間の夕刻、すなわち、暗黒にとざされるなかで、新しい朝の希

望の光を待ち望みながら、共に祈ることは重要である。夜を徹して祈ることは、一般参集者をふくむ共同の行為としては通常不可能であるが、遺族や近親者が、参集者の祈りに支えられて、平安のうちにその夜を過すことができるように祈るときである。また、逝去者が信者である場合はことに、その生前の祈りの生活を、死と暗の力によっても断たれないことを表わし、この祈りに集まる者たちによって、受け継がれることを表わす<sup>9)</sup>。

「夜」や「暗黒」、「朝」、「光」といった象徴的な言葉を用いながら、悲しみや寂しさ、辛さ、苦しみ、絶望、それに打ち勝つ希望や平安などを求めて祈ることが勧められている。日中に行われる葬式との違いを十分に意識して前夜式を執行することが重要である。この「まえがき」は現行の前夜式を行う際にも十分に意識されるべき内容であろう。

## （２）『日本基督教団式文（試用版）』

『試案』が発行されて16年後、日本基督教団は2006年に信仰職制委員会編『日本基督教団式文（試用版）』（以下「『試用版』」）を発行した。本来なら『試案』を基に新式文を発行する予定があったと思われるが、「評価と検討を行った結果」として、「全く新しく式文を改訂する必要があるとの結論に至った」という。その理由についてはここで詳しく触れることはできないが、葬儀諸式に関しては「全く新しく」改訂したものの範疇に属さない。『試用版』において葬儀諸式の式文は以下ようになった。

1 枕頭の祈り・臨終の祈り、2 納棺の祈り、3 出棺の祈り、4 前夜式・前夜の祈り、5 葬式（葬送式）、6 火葬前の祈り、7 埋葬の祈り（埋骨の祈り・納骨の祈り）、8 記念式（記念礼拝）

流れとしては、『文語式文』や『口語式文』、『試案』を踏襲していることがわかる。八種の式文があり内容もほぼ同じである。しかし名称は、文語・口語式文で採用されてきた「前夜式」と、『試案』で採用された「前夜の祈り」が併記されているのである。その意図は不明だが、各個教会の実態として前夜の祈りという名称がすぐに馴染むとは思えず、多くの教会で「前夜式」という名称が依然として使われているという現状を考慮したと推測できる。ただし信仰職制委員会としては前夜の祈りのほうを推奨したようである。説明が以下のようになされている。

前夜式の祈りは、葬式の前夜（あるいは召天の夜、火葬前後）に行われる営みである。近年、一部において、前夜式の形式や内容が、葬式（葬送式）に似たものとなりつつある傾向がある。ここでは、葬式に備えつつ、会衆が故人を覚え、家族への支えや励ましを共に願い求める時として、この営みを想定している…<sup>10)</sup>。

信仰職制委員会も前夜式が葬式と「似たものとなりつつある傾向」を認識しており、両者の区別が意識されることを要望しているのである。しかしその意図が式文順序に表れているようには思えない。次第は以下の通りである。



#### [前夜式・前夜の祈りの式]

賛美歌、聖書、祈祷、説教、感話、故人の思い出、祈祷、愛唱賛美歌など、主の祈り、賛美歌または頌栄

この式次第は『試案』よりも通常の礼拝形式に近いものとなっている。つまり現行の『口語式文』における葬式式文の内容とほぼ同じなのである。さらに『試案』では「奨励」となっていたが「説教」に戻っている。しかも『口語式文』では「説教又は感話」となっていたのと比較すると、通常の主日礼拝などの形式に最も近いものとなった。この式文を使用した場合は、前夜式と葬式の区別がさらにつきにくくなる。しかも「前夜の祈り」ではなく、「前夜式・前夜の祈り」という名称に戻してしまうと、結局は現行と変わらないものとして認識づけられても仕方がない。前夜式と葬式のそれぞれの特色を生かしたいという『試案』の意図は失われてしまったように思われる。経緯や現状から鑑みると、名称は「前夜の祈り」のみとして、『試案』の式次第を採用するべきではないだろうか。それが「前夜式の形式や内容が、葬式（葬送式）に似たものとなりつつある」という傾向を変化させる効果的な方法だと思われるからである。

以上、日本基督教団の式文を試案や試用版を含めて確認してきたが、『試案』は前夜式の役割を明確に示していた。しかし現行の『口語式文』も最近に発行された『試用版』も、前夜式と葬式の明確な相違がわかりにくい。前夜式と葬式が同一化するという傾向には使用される式文からの影響も少なくない。式文改訂は急務であることを確認しておきたい。

### 3. 他教派における式文（通夜、通夜の祈り、通夜記念式）

日本基督教団とは違う教派の式文はどのようなになっているのだろうか。先述したように他教派においても前夜式と葬式が似てきているという問題が生じている。教派ごとの式文を確認し、前夜式と葬式の位置づけやそれぞれの特徴を確認する。

#### (1) カトリック教会

カトリック教会で式文に当たるものは「儀式書」である。日本のカトリック教会は、1969年に公布されたローマ儀式書「葬儀」のラテン語規範版に基づいて、日本の地方的特色を取り入れた特殊儀式書を作成し、1971年に全国共通の儀式書としてこれを認可した。さらに、1993年に『カトリック儀式書 葬儀』が発行された。カトリック教会における葬儀とは「通夜から埋葬までの一連の儀式」を指す<sup>11)</sup>。通夜は日本の司教団の強い要望により初めて典礼の一部とされたという。

カトリック教会の「通夜」は三つの形式が用意されている。1、教会、あるいは自宅で行う通夜、2、自宅で行う通夜、3、教会で行う通夜である。ここでは最も長い式次第が示されている「1、教会、あるいは自宅で行う通夜」を見てみよう。

はじめのことは、聖歌、招きのことは、聖書朗読、説教、ともに祈る、献香と焼香（献花）、結びの祈り

この式順で目を引かれるのは「ともに祈る」である。五つの祈りが用意されており、五つ全てを祈るのも、いずれか選択するのも可能である。通夜式文の最初には「通夜は、遺族、地域社会、職域社会、キリスト者の共同体などがそれぞれの立場から故人をしのび、故人のために祈り、また遺族を慰める集まり」と説明されている。「ともに祈る」ことの具体的手段として共唱の形式が取り入れられているのが特色であろう。先唱者が「聖書の言葉によって祈りましょう」あるいは「詩編のことばによって祈りましょう」と発し、一同が続く交読の形式をとる。司式者による祈りだけでなく、一同で共にささげる祈りなのである。式文には「共同祈願」の例文も提示されている。これら詩編の共唱や共同祈願が取り入れられたことは参加者からも好評であるという<sup>12)</sup>。日本基督教団の「前夜の祈り」においても、ともに祈るという機会があれば、祈りの集いという性格がより明らかにすることができるのではないだろうか。

ところで『カトリック儀式書 葬儀』の緒言には、以下のような文章が見られる。

通夜は本来、遺族と親族が故人をしのび、最後の夜を故人の自宅とともに過ごす私的な集いであり、葬送と埋葬は地域社会の手によって行われる公的性格の強いものであった。しかし、社会状況の変化により、現代では通夜に参加することによって社会的責務を果たす人が年々増えている。そこで通夜の祈りも本来の目的（故人をしのび、遺族を慰める）に加え、キリスト教の葬儀の特質である「キリスト信者の死の過越の性格をより明らかに表現する」（『典礼憲章』81）ようにした<sup>13)</sup>。

カトリック教会の通夜は本来「私的」な集いであり、それに対して葬送と埋葬では「公的」という意図を反映する式文がそれぞれに用いられてきた。しかし通夜の参加者が増えたことによりその対応に迫られたようである。緒言にあるように本来の目的に新たな目的が加わったのである。その主な内容はキリスト教の死についての理解を説明することである。「司式者が司祭、助祭の場合は、できるだけキリストの死と復活の神秘について語るとよい」という指示もなされている。このような内容を通夜の参列者に示すことは重要であり、参列者への配慮がなされた対応であるといえよう。ただしカトリック教会においても通夜と葬送の内容が似てくるという状況に至るのではないかという懸念がある。カトリック教会の場合、葬儀でミサを行う場合（葬儀ミサ）は、プロテスタントとは異なり通夜との相違は比較的明確であり、それは杞憂に終わるのかもしれない。しかし参列者にキリスト者でない人が多い場合に行う「ことばの祭儀による葬儀」の際などには、その可能性はあると思われるのである。

## （2）日本聖公会

日本聖公会もカトリック教会同様、「通夜」という用語が使用されている。現行の『日本聖公会祈祷書』では「通夜の祈り」として収められている。聖公会の場合は2002年刊行の英国聖公会の祈祷書においても、葬送式前夜に用いるヴィジル（前夜礼拝、徹夜礼拝）が採用されているという<sup>14)</sup>。通夜の祈りは「主の愛のうちにみ言葉と詩と祈りをもって主のみ前で逝去者をしのび、葬送の心の備えをする集まりである」と規定されている。

#### [通夜の祈り]

主の祈り、聖書朗読、詩編、教話、祈り

このパターンをいくつか繰り返すと指示されている。祈りの後にはシメオンの賛歌または復活の歌、聖歌を用いてよいとされている。パターンについては、七つのテーマが与えられており、それらを組み合わせて用いるように指示されている。カトリック教会同様、聖公会も「祈り」を強調していることがわかる。繰り返されることでその印象が強くなるだろう。

さらに「聖書朗読または教話のあとに黙想の時をおいてもよい」という指示も見られる。「いっそうのヴィジルの礼拝の流れが可能」となり、「葬送への心の備えを充分に行うため」にも沈黙や黙想が行われるという<sup>15)</sup>。式文において「黙想の時」を明示していることも他の教派と比べた際に特徴となるだろう。

ところで聖公会でも葬送式よりも通夜の祈りの参列者の人数が多いという発言については既に引用したが、今後もその傾向が続くと、やはり通夜の祈りと葬送式が似てくるようになるのではないだろうか。その現状については「止むを得ない事と受けとめられよう」という意見もある<sup>16)</sup>。確かにそうではあるが、おそらく他教派のように参列者への配慮という点から、形式内容の変化が生じるだろう。すなわち葬送式と通夜の祈りの内容が似てくるようになり、その区別がつきにくくなるという結果となる。祈りや黙想を重視したこの通夜の祈りをどこまで維持できるかが課題となるかもしれない。

### (3) ルーテル教会の場合

現行の式文『ルーテル教会式文（礼拝と諸式）』には九つの葬儀諸式が収められている。

臨終の祈り、納棺の祈り、通夜記念式、葬式、出棺に際して、火葬に際して、納骨の祈り、周期記念会の祈りである。ルーテル教会は他のプロテスタント諸派とは異なり「通夜」という言葉を採用し、葬式前夜の式を「通夜記念式」と呼ぶ。

#### [通夜記念式]

讃美歌、讃美唱、特別の祈り、聖書、説教、讃美歌、祈り、主の祈り、讃美歌、祝福

式文の通夜記念式という題字の下に（葬式前の記念式あるいは前夜式）と記されている。名称については「葬式前夜の祈り」、あるいは「棺前祈祷会」と呼ばれてきたが、通称は依然としてお通夜であり、その仕方は違っても「通夜」という名称をつかってよいのではないかと考えられたようである<sup>17)</sup>。

通夜記念式は「指針」（「ルブリック」とも呼ばれる）によると、「逝去者を偲び、遺族への慰めを祈るために催される」という目的が明確に示されている。祈りには「特別の祈り」と「祈り」の二度の機会があるが、後者のほうは、指針によると「この他、適切な祈りを、また会衆の祈りを加えてもよい」とある。通夜記念式も特に祈りを重視していることがわかる。

さらに日本ルーテル神学大学の石居正己氏によると、ルーテル教会の通夜は非公式で近しい

人々が故人の思い出を語り合い、遺族への慰めを祈るものであり、葬式が公式な式として考えられているようである。ただし葬式より通夜の方に多くの参列者があり、式を行う方もそれを意識してまるで葬式を二度するような実際になってしまう場合があると述べている。興味深いのは、石居氏が「現代の人々の葬式様式とその地域の事情によっては通夜記念式がいちばん中心になって、多く翌日に行われる葬式は、むしろ出棺式ということになっていくこともあるかもしれない」と指摘していることである<sup>18)</sup>。次に引用するカンバーランド長老キリスト教会でも議論された斬新な発想であり、かつ現実的提言とも言えるだろう。

#### (4) カンバーランド長老キリスト教会

『カンバーランド長老キリスト教会礼拝書』が式文に該当するものであり、八つの葬儀諸式が収められている。臨終の祈り、納棺の祈り、出棺の祈り、前夜礼拝、葬礼拝、火葬前の祈り、埋葬礼拝(納骨礼拝)である。われわれが注目するのは「前夜礼拝」であり以下の通りである。

##### [前夜礼拝]

招詞、前奏(沈黙)、賛美、祈り、聖書朗読、賛美、主の祈り、説教、信仰告白、頌栄、祝福、後奏(沈黙)、遺族挨拶、献花／飾花

ちなみに前夜礼拝と葬礼拝の式順を比較すると、両者はほとんど同じであることがわかる。後奏(沈黙)までは全く同じで、葬礼拝ではその後に、遺族挨拶、棺内飾花、出棺と続く。

しかし前夜礼拝と葬礼拝は内容的には大きく異なったものである。まず前夜礼拝は「復活を証しする礼拝」としてもよいという但し書きも付加されており、「会葬者(礼拝共同体)、とりわけ遺族に、復活の希望を指し示す礼拝である」とされている。また葬儀諸式の冒頭にある説明には、「特に、『死』から『葬』に至る営みの中で迎える夕刻、暗黒が迫る中で行われる前夜礼拝(復活を証しする礼拝)は、新しい朝の希望の光を待ち望む祈りのときである。悲嘆の中にある会葬者(礼拝共同体)、とりわけ遺族に、復活の希望を指し示すものである」と記されている。これに対して葬礼拝は「葬式、または出棺礼拝、出棺式としてもよい」とあり、出棺が念頭に置かれた式なのである。

これらの指示から、カンバーランド長老教会では前夜の礼拝が重視されていることがわかる。それについては同教会の荒瀬牧彦氏が紹介する礼拝書委員会でのやり取りに示されている。草案担当者が、「葬儀全体を通して、礼拝共同体の中で、遺族、会葬者のグリーフ・ワーク(悲嘆の癒し)がなされることが大事である」という視点から、大胆な案を委員会に提示したという。具体的には、前夜に行われる礼拝を「葬礼拝」とし、葬儀当日の礼拝を「出棺礼拝」とするというものであった。この案は荒瀬氏が述べているように「前夜の式がグリーフ・ワークの中で果たす役割を重んじる画期的な提案」であるのは間違いない。しかし、「現行の習慣と大きく違ってくるところから来るためらいや、前夜式を行うことを必ずしも奨励しない立場もあることなど」により、最終的には現行のものになったのだという<sup>19)</sup>。

採用はされなかったが、グリーフ・ワークという視点から前夜礼拝をメインに置き、翌日の

葬礼拝を出棺礼拝とするというのは発想の大きな転換である。1章で前夜式と葬式の一本化について述べた。そこでは葬式を夜に行うことも検討したが、参列者目線による発想であり採用はできないとした。しかしカンバーランド長老教会の草案では遺族や近親者に焦点を定め、そのグリーフ・ワークとして前夜に行う葬礼拝を提唱している。単なる「一本化」とは大きく異なっているのである。採用が見送られた理由についてわれわれも納得できるが、示唆に富んだ提言であるといえよう。今後のさらなる検討により新たな展望が開けることに期待したい。現段階でもグリーフ・ワークに力点を置く前夜礼拝を行う努力をするならば、葬礼拝との区別も鮮明になるであろう。既に見たように同教会でも前夜礼拝と葬礼拝が類似し、同じ事を二回繰り返しているような現実があるという。それを回避するための視点は既に与えられているように思われる。

## 4. 前夜式の意義と目的

### ①祈りが中心

五つの教派の式文確認作業を行ったが前夜式と葬式にはそれぞれの役割があるということがわかった（なお既に見てきたように教派によって、それぞれの礼拝には個別の名称があるので特別な指示が無い限り、総称として「前夜式」と「葬式」と呼ぶ）。特に前夜式は各々の式文で意義や目的が示されており、葬式とは異なる役割が明示されているのである。日本基督教団については現行式文においてはその意義などが欠如しているが、『試案』や『試用版』には改善の意向が見られる。特に『試案』は他教派の指示と同様、よりの確な指示がなされているように思えた。

いずれにしても明確な意義や目的があるにもかかわらず前夜式と葬式が似ているというキリスト教会の現状は深刻な問題である。式文の指示等に従って実行するならば、違いが現れてくるのは間違いない。そうならず同一化しているのは、やはり現場が社会状況にあわせた対応をしているという理由に尽きることになる。しかしそれは参列者の事情を配慮しすぎているのではないだろうか。遺族や近親者を慰めるためにという視点を忘れてはならない。

各教派の式文にも示されていたように前夜式の意義と目的は、悲しみと嘆きにある遺族や近親者に寄り添い、慰めと励ましを与えられることを皆で心から願うことであり、具体的には共に祈るということである。前夜式の中心は祈りである。ゆえに前夜式の祈りの時間は必ず確保すべきものである。前夜式は葬式とは異なる形式で行われる祈りを中心にした礼拝である。カトリック教会の詩編の共唱や共同祈願は「ともに」が見える形で表現される。ぜひ他教派でも参考にして取り入れることを検討すべきであろう。

また、時間帯を意識することは重要である。前夜式が行われる夕方から夜にかけての時間帯には、上に挙げた教派のほとんどの式文が言及するように深い配慮が必要である。暗闇や静寂が愛する家族や知人を亡くした者を包み、その悲しが増す。日中以上にその悲しみに寄り添う姿勢が重要となる。

さらに、前夜式で可能な限り私的な雰囲気も残すことは重要であろう。どうしても葬式は公式な形式を取らざるを得ないが、前夜式の場合は、ルーテル教会のように近い人が故人の思

い出を語るようなことなどがあると葬式とは異なる雰囲気が生じて遺族が悲しみを表出できる機会にもなる。また前夜式のほうが葬儀と比較すると時間的な余裕がある。遺族の疲れを考えると長時間は避けるべきであるが、形式的にならずに遺族や近親者にゆっくり寄り添うことは大切なことである。

## ②教会の行為としての前夜式

前夜式は教会による行為である。たとえ私的な雰囲気があったとしても教会の公式な行事である。しかし例えばアメリカの教会では前夜式は行われない。日本に多くの宣教師を派遣しキリスト教を伝えたアメリカのキリスト教会であるが、彼らは教会の公式行事として葬式の前夜に何かを行うことはしないのである。

現代のアメリカでは、宗教による葬儀は基本的に葬式、記念式、埋葬式の三種類で構成されている。一般的なプロテスタントの場合は、葬式の前（前日、もしくは直前）に訪問（visitation）と最後の対面（viewing）が行われる。visitation は viewing さらに calling などの名称で呼ばれることもあるが、ほぼ同じ内容を指す。ある一定の期間、葬祭場（遺体安置所、funeral home）にて訪れた人が遺体と対面できるように準備されている。多くの場合棺は開かれており、遺族も列席している。訪問者は故人との最後の別れに来るのだが、当然遺族への挨拶や慰めの言葉が語られる。

ちなみにこの場に牧師や司祭は同席していることもある。例えばフォーラーはこの時間が牧師にとって重要なときであることを述べる。牧師はそこに居るべきあり、遺族に慰めを表現するようにという。また訪問の時間は遺族の家族や親戚、友人と会える貴重な機会である。彼らから思い出話を語ってもらうことで、それを葬式で紹介することができるという<sup>20)</sup>。いわば説教作成のためのリサーチの場ということになるのだろう。

いずれにしてもこの訪問には私的な雰囲気があり、弔問者が遺族に弔慰を述べてゆっくり悲しみを分かち合うことができる時間である。時間的には5時間くらいが設定されており、午後であるならば2時から7時までに行うくらいが一般的である。もちろん設定は自由で、日数や時間帯については訪問者の数にあわせて決定する。

カトリック教会の場合は、通夜（wake）あるいは徹夜祈祷（vigil）と呼ばれるものがある。通夜もしくは徹夜祈祷は葬式の前の日（複数の場合もある）に自宅で行われ遺族が遺体のそばで徹夜をして弔問する人々を受け入れる。ただし教会や葬祭場で行われることもある。この場合は公的な装いとなり、司祭により棺に聖水が降りかけられて祈祷が捧げられる。聖書朗読やロザリオの祈り、主の祈りなども行われる。遺族や友人から故人の思い出が語られることや弔辞が述べられることもある<sup>21)</sup>。

以上がアメリカの事情であるが、カトリック教会の例にあるような公的な集いになるケースは稀なものとして、日本の教会の前夜式などとは大きく異なっていることがわかる。形式は決められておらず、特別な式文も無く、短い指示によるものや自由裁量に任されているのである。プロテスタントの場合も同様で、たとえば米国合同キリスト教会の式文（“Book of Worship”）を参照すると、葬儀に関するものとしては臨終の際に行う式文があるが、他は葬式と埋葬式用

の式文のみである。つまり訪問（visitation）は基本的には私的なものであり、配慮がなされることがあっても公的な儀式ではないのである。

このアメリカで行われている訪問や通夜などを仮に日本で行うとすればどうであろうか。これを実践するには問題が多い。まず日本では場所の問題がある。一般的な住宅事情を考えると自宅の一室を開放して弔問客を次々に受け入れることは難しいだろう。前夜式や葬式が教会で行われる場合が多いのは自宅での場所の確保が困難だという理由が多い。

また決定的に異なるのは時間的余裕の差である。アメリカの場合は人が亡くなった場合も即座に葬式が行われることは少ない。日本のように多くが死後24時間を経てなるべく早くに火葬されるという国では、臨終の翌日に長時間にわたり弔問客を迎え、しかも夜を徹するようなことはとても勧められるものではないだろう。

さらにアメリカではこれらが教会としての行為ではなく、個人の行為になっているところが、問題であると思われる。キリスト教葬儀全体における目的は故人を神にゆだねることと、遺族や近親者に神からの慰めと支えを願い求めるためである。しかも日本基督教団式文（試用版）「葬儀諸式の解説」にあるように、これらは教会の「共同体的な行為」として行われるものであり、私的な営みではない。教会が「牧会共同体」としてその業を果たす営みである。教会はキリストの体であり、一人一人はその部分である（I コリント 12:27）ゆえに、その部分のためには全体的な行為が行われなければならない。部分が死という極めて重大な事態にある時は特にそうであろう。教会の存在意義をかけて葬儀に関する式は教会の行為として行うことが重要であると考えます。前夜式もその一つなのである。

## おわりに

日本における葬儀の在り方が大きく変化している時代である。直葬、一日葬が広く認知されて利用者数も増加している。この傾向に拍車がかかると予想されるが、このような時代であるからこそ改めてわれわれは葬儀の意義を深く問わなければならないのである。葬儀は単に死者を葬るだけの儀式ではない。葬儀は社会を映す鏡でもある。なぜ葬儀が簡略化されているのか、超高齢化社会、経済的理由、人間関係の希薄などの複合的な理由を挙げて説明しなければならないが、死という悲しみの極みにおける共同の営みについて丁寧な議論を重ねない社会は危険であるということを指摘しておきたい。キリスト教会においても一層の議論が深められるべきである。仮に一般社会において葬儀が軽視され簡略化が進む場合には、キリスト教会は葬儀の意義を存分に語らなければならない。前夜式の再考察という作業もその一歩であろう。

## 注

- 1) 『信徒の友』2月号、日本キリスト教団出版局、2013年2月、94頁
- 2) 日本基督教団で「葬儀」とは前夜式や葬式、記念会などの総称であり、「葬儀諸式」と呼ばれる。ここでは「葬式」の意味で使用されていると思われるので「葬式」とする。
- 3) 『礼拝と音楽』137号、日本キリスト教団出版局、2008年、14-25頁
- 4) 同24頁
- 5) 筆者がアメリカの日系人教会で牧師をしていた時、午後七時から葬式を行い、式後に出棺なされた。

一般的にアメリカでは「骨揚げ」が行われないため、遺族が火葬場に行くことが無いのでこういうことが可能となるのだが、火葬を翌日に行うことにすれば日本でも夜の葬儀は可能となるだろう。

- 6) 日本基督教団信仰職制委員会編『日本基督教団文語式文』、1949年、2頁
- 7) 日本基督教団信仰職制委員会編『新しい式文 試案と解説』、日本基督教団出版局、1990年、140-141頁
- 8) 同139頁。ちなみに「葬式」のみを〈式〉と呼び…とあるが、記念会は記念の祈りとしていないので、「のみ」という表現は誤りであろう。
- 9) 同145頁
- 10) 日本基督教団信仰職制委員会編『日本基督教団式文（試用版）』135頁
- 11) カトリック中央協議会『カトリック儀式書 葬儀』第2版、2004年、19頁
- 12) 『礼拝と音楽』17頁
- 13) 『カトリック儀式書 葬儀』19頁
- 14) 『礼拝と音楽』18頁
- 15) 同19頁
- 16) 同上
- 17) 日本ルーテル神学大学教職神学セミナー編『現代葬儀事情』、キリスト教視聴覚センター、1994年、75頁
- 18) 同76頁
- 19) 『礼拝と音楽』24頁
- 20) FOWLER, Gene 'Caring through the Funeral A Pastor's Guide', Missouri: Chalice Press 2004. pp. 18-19
- 21) Searl, Edward 'In Memoriam: a guide to modern funeral and memorial services', Boston: Skinner House. pp. 15-16や Bregman, Lucy 'Religion, Death, and Dying Volume 3: Bereavement and Death Rituals', Santa Barbara: ABC-CLIO. pp. 53-54参照。

#### 参考式文等

- ・ 日本基督教団信仰職制委員会編『日本基督教団文語式文』改訂6版
- ・ 同 『日本基督教団口語式文』23版
- ・ 同 『新しい式文 試案と解説』
- ・ 同 『日本基督教団式文（試用版）主日礼拝式・結婚式・葬儀諸式』
- ・ カトリック中央協議会編『カトリック儀式書 葬儀』第2版
- ・ 日本聖公会『祈祷書』改訂第1版
- ・ 日本福音ルーテル教会、日本ルーテル教団『ルーテル教会式文（礼拝と諸式）』第2版
- ・ カンバーランド長老キリスト教会日本中会礼拝書特別委員会『神の民の礼拝 カンバーランド長老キリスト教会礼拝書』

（原稿受理日 2013年9月30日）